優秀賞

安心して暮らすために

滋賀県　近江兄弟社中学校　一学年　中島　ゆず

三年半前、私が小学三年生の冬、父が急性大動脈解離で倒れました。私と母の目の前で手が冷たくなってゆく父にどうすることもできず、救急車が来るまでただあわてるばかりで、怖くて心配でした。隣のおばちゃんがかけつけてくださったり、事情で別の病院に搬送されたり、母があわてて駐車場で転んだり本当に大変な夜でした。

父は病院で処置してもらって、命は助かることがわかりましたが、手術をしてもらい一カ月半ほど入院することになりました。

ひとまず安心しましたが、それからは大変な毎日が待っていました。父がやっていた家事は、母や私がやらなくてはならず、小学校帰りの私を気遣って祖父母がかわるがわる来てくれたり、毎日の食事も外食やスーパーの惣菜が増え、母の負担が大きくなっていたことを、とても心配したことを覚えています。

父が入院したことで、それまでの暮らしが普通にはできなくなってしまいました。

今回、私が生命保険の作文を書くことにしたのは、あの時父が病気をして、私の暮らしに何が起こったのかをもっと知りたいと思ったからです。父と母にたずねてみると、まず父の病気はとても重いもので、長い入院と多くのお金がかかることを心配したそうです。それから、当時学童保育には行っていなかった私がひとりになってしまうこと、さらには一家の大黒柱となった母が、私の家庭にさらに不測のことが起こったらどうするかを心配したそうです。

父は、手術・入院をした時の保険のことを教えてくれました。とても大きな手術で、たくさんの費用がかかりました。公的医療保険の給付で、ずいぶん負担は軽くなったものの寝間着やタオル、おむつなどの医療費以外の費用も少なくなかったそうです。一カ月半で退院して家にいてくれるようになったのはうれしかったけれど、経過を見るための通院は今も続いていて、みんなに心配をかけて申し訳なかったことと、病気のあと体力が落ち、体調や気力を維持するのは大変だったと言っていました。それでも、入院の日額給付や治療の保障が手厚い生命保険に入っていたので、お金の面ではとても助かったとも言っていました。

母は、父が大きな病気を抱えたことで、もしも母が働けなくなるようなことや、母自身の生命にかかわることが起こったらどうしようかと考えたそうです。公的保障だけでは暮らしていくことは難しいので、死亡保険に入ると言って

いました。家族が暮らしていくためには、三年半前にあったようなもしものことを想像すると、とても大切なことだと思いました。

私なりに調べてみたことは、生命保険は大勢の人が保険会社に保険料を支払って、このお金を万が一の時に保険金や給付金として受け取るものだと知りました。これは、万が一のための貯金なのかと思いましたが、生命保険は、保険料をかけてさえおけば、やがて病気の重さにかかわらず、すぐに保障が受けられて同時に家族の生活に必要な資金も備えておくことができるところが、そもそも違うということがわかりました。

いろいろ調べているうちに、本当に大勢の人や家族が生命保険に入っていることを知りました。私は父が大きな病気をしたことで実感しましたが、保険料をかけることは、日頃のお買い物のようにお金を払って目に見える品物を手に入れることとは違います。でも、もし生命保険に入っていなかったら、今とは違う暮らしをしていたのかなと思います。今の暮らしがあって、初めて入っていてよかったと言えるのが生命保険で、加入している大勢の人もそう考えているのだと思いました。

私は、中学校に入学して部活動をするようになったので、母が私をケガの保険に入れてくれました。今度は、私自身も加入したことで家族にそれぞれの保険があって、安心して暮らせているのだと思いました。